

2015 年度（第 4 2 期）

山崎農業研究所会員総会資料

I. 総会

I-1、 2015 年度活動報告

I-2、 2016 年度活動計画

II. 第 40 回山崎記念農業賞 別紙

III. 記念フォーラム 別紙

2016 年 7 月 23 日（土）

山崎農業研究所

総会プログラム

- 1) 日時 2016年7月23日(土) 13時00分～17時00分
- 2) 場所 NTC コンサルタンツ(株) 大会議室
(東京都中野区本町1丁目32番2号ハーモニータワー20F)
- 3) 総会・山崎記念農業賞表彰式・記念フォーラム
 1. 開会の挨拶 所長 小泉浩郎 13:00～13:10
 2. 総会 13:10～13:40
 - ①議長選任
 - ②2015年度活動報告
 - ③会計監査報告
 - ④2016年度活動計画
 3. 山崎記念農業賞表彰式・お祝いの言葉 13:40～14:20
 - ① 選考過程報告 渡辺 博(事務局長)
 - ② 農業賞表彰式 受賞者:川田 修 氏(株川田農園 代表)
 - ③ お祝いの言葉
京王プラザホテル和食総料理長 加藤 敏之 氏
 - ④受賞者挨拶 14:20～15:00
「野菜作りの思いとこだわり」
株川田農園 代表・川田 修 氏
(休憩) 15:00～15:20
 4. 記念フォーラム 15:20～17:00
「こだわり」で結びあう農と食―農園と厨房をつなぐ川田農園の挑戦―
 - ① フォーラム解題
山崎農業研究所 所長 小泉浩郎
 - ② 我が国における有機農業の動向
元日本土壌協会専門委員(会員) 家常 高 氏
 - ③ 「栃木県の6次産業化振興と川田農園の特徴」
栃木6次産業化ポータルセンター・実践アドバイザー(会員) 小林俊夫 氏
 - ④ 「農園」から「厨房」まで
株川田農園 代表 川田 修 氏
 - ⑤、質疑応答
- 4) 懇親会 18:00～20:00
京王プラザホテル(都庁近傍) 樹林

山崎農業研究所

第42期総会議案書

(2015年7月1日～2016年6月30日)

1. 日時 2016年7月23日(土) 13時00分～17時05分
2. 場所 NTC コンサルタンツ(株) 大会議室
(東京都中野区本町1丁目32番2号ハーモニータワー20F)

3. 議事次第
 - 3-1. 議長の選出
 - 3-2. 議案審議
 - (1) 第1号議案
2015年度(2015年7月1日～2016年6月30日)活動報告について
 - (2) 第2号議案
2015年度(2015年7月1日～2016年6月30日)決算について(省略)
 - (3) 第3号議案
2016年度(2016年7月1日～2017年6月30日)活動計画について
 - (4) 第4号議案
2016年度(2016年7月1日～2017年6月30日)予算について(省略)

第1号議案

2015年度活動報告

(2015年7月1日～2016年6月30日)

1. 活動経過

2015年3月に閣議決定された「食料・農業・農村基本計画」では、従来のカロリーベースの自給率よりも生産額の自給率を重視する姿勢が打ち出された。「売れる農産物」の推奨であり、TPPに代表される自由貿易の流れに沿った政策展開である。一方2015年10月TPPの「大筋合意」後、米国では各大統領候補の主張に見られるようにTPP反対や慎重論が大きくなり、欧州では英国のEU離脱という、グローバリズムとは真逆の政治的潮流が目立ってきている。一方、世界には200兆ドル(2京円以上)を超える金融資産が溢れ、本来貧困の解消や教育、福祉、文化に投資されるべき人類の共有財産であるこれらの資産は、国境を越えた自由な「投資先」を探し、世界経済の混乱を引き起こしている。現在起きているアンチグローバリズムの政治的潮流がグローバリズムへの抵抗としての政策選択であるとは単純には規定できるものではないものの、行き過ぎたグローバリズムの矛盾が無視できなくなってきたことの表れであるといえる。

このような中で、山崎農業研究所は農業の基本は家族農業や地域の協働に根差したローカリズムにこそ、その存立基盤があるという姿勢を貫いてきた。7月の総会での山崎記念農業賞授与は、山間農村で家族農業を基礎に自主的組織による物産の直売所運営に取り組んでいる新潟県上越市の「手作り百人協同組合」に、10月の現地研究会は都市農業から地方自治を考えることをテーマに「練馬区白石農園」を視察、12月の定例研究会では地域の自然条件を最大限に活かした土づくりをテーマに「茨城県牛久市女化の高松農場」の現地見学を实践し、5月の定例研究会はアンチグローバリズムをテーマに関廣野氏による「グローバリゼーションからローカリゼーションへ」の講演会を開催した。

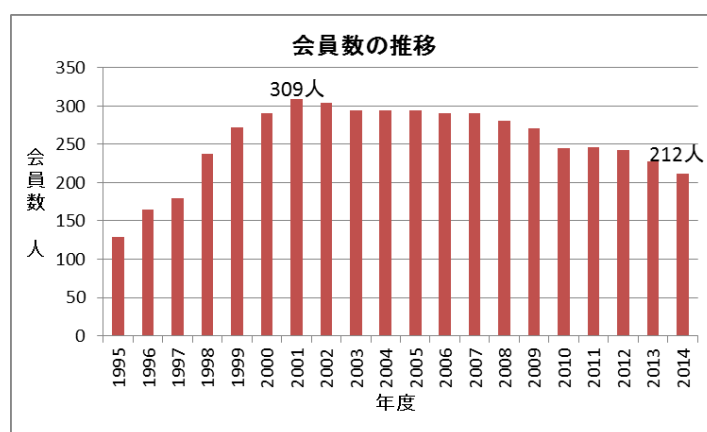
研究所活動の重要な柱である機関誌「耕」については、研究所の提言、意見をより幅広く広めるために、2015年度から農学系の44大学、47の公立図書館に寄贈し、このうち書庫の余裕がないなどの理由により寄贈の断りを申し出たのは9大学、7公立図書館にとどまり、多くは好意的に受け止めてくれた。また、ホームページを見て、“賛同した、勉強になった”というようなメールが寄せられるなど、研究所活動の多様な広報活動の重要性が浮き彫りにされた。

研究所の組織運営では、依然として会員の高齢化と減少という大きな課題を背負っており、ピーク時(2002年)300人を超えていた会員は、2010年度に幽霊会員を整理したこともあって、現在(2016年6月30日時点)194名まで減少している。その中で事務局を中心に会員勧誘を進め、2015年度は新たに5名の会員を迎え入れた。

2. 会員の動向

(1) 会員数

時点	会員数	退会	入会
2015年 6月30日	212名	23名	5名
2016年 6月30日	194名		



(2) 会費納入状況 (会員数は各年度当初の人数)

年度	会員数	納入者	未納者	納入率	備考
2010	271	216	55	79.7%	
2011	245	211	34	86.1%	
2012	246	210	36	85.4%	
2013	242	182	60	75.2%	
2014	227	167	60	73.6%	
2015	212	159	34	82.0%	

3. 組織運営

(1) 幹事会

幹事(所長) 小泉浩郎

同(事務局長) 渡邊博

同 山路永司、石川秀勇、塩谷哲夫、田口均、西山和宏、益永八尋

監事 松野肇

(2) 事務局

小泉浩郎(総括、表彰) 渡邊博(総務、事業) 田口均(機関誌、出版)

益永八尋(会計)

(3) 顧問

熊澤喜久雄、田淵俊雄、松坂正次郎、中川昭一郎、安富六郎

(4) 幹事会の開催

第1回幹事会 2015年 10月 8日 (幹事 5名)

第2回幹事会 2016年 2月 17日 (幹事 5名)

(5) 山崎記念農業賞選考(事務局)会議の開催

農業賞選考会議 2016年 7月 6日 (幹事 4名)

4. 活動の実施

(1) 機関紙「耕」の発行

136号 2015年8月31日 (部数; 320部、寄贈 21部)

特集「農政改革の両輪を問う」「誰のための被災地復興か」等

137号 2016年2月10日 (部数; 320部、寄贈 21部)

特集「山崎記念農業賞：手作り百人協同組合」「東京練馬で都市農業を学ぶ」等

138号 2016年5月20日 (部数; 320部、寄贈 100部)

特集「実践に学ぶ土づくりの思想」、「土づくりと微生物」等
社団法人等 22、自治体図書館 40 大学図書館 38

(2) はがき通信

No.245 (15/09/18)、246 (15/11/10) 247 (16/03/22)、248 (16/06/27)

(3) 電子耕(メルマガ)

第380号～第389号、8回発行。発行部数987部 (No.389)

(4) 研究所ニュース(会員向け)

第1号(15/08/10)、第2号(15/11/01)、第3号(16/01/01)、第4号(16/05/10)

(5) 総会・研究会等

第41期総会 2015年7月25日(土)

NTC コンサルタンツ(株) 会議室

1) 総会: 2014年度報告、2015年度計画

2) 山崎記念農業賞 授与式 手作り百人協同組合

3) 記念講演

① 「選考委員報告」 塩谷 哲夫 氏

② 「お祝いのことば」 中島 哲 氏(東京杉並・大提灯米店)

③ 「受賞者講演」 増野 秀樹 氏(手作り百人協同組合事務局長)

④ 「記念講演」 大江 正章 氏 (コモンズ代表; ジャーナリスト)
参加者; 参加数 31名 (講師 2名含む、会員 16名、非会員 13名)

152回 定例研究会 2015年10月18日(土); 現地
東京都練馬区 白石農園 代表; 白石好孝氏
テーマ; 都市農業の実践に学ぶ (白石氏より報告)
参加者; 参加数 15名 (講師 1名、会員 10名、非会員 4名)

153回 定例研究会 2015年12月20日(土); 現地
現地見学 茨城県牛久市 高松農場 代表; 高松求氏
塩谷哲夫氏、高松求氏より報告
研究会 牛久市リフレプラザ
テーマ; 実践に学ぶ「土づくり」の思想
講演; 私の「土づくり」半世紀 高松 求 (茨城県牛久市 農家)
「高松さんに学ぶ土づくり」茨城大学 小松崎将一氏 (茨城大学)
「土壌生成メカニズムからの土づくり」高味充日児氏 (T&G代表)
「植物も少し厳しい環境だとよく育つ」成澤才彦氏 (茨城大学)
参加者; 参加数 18名 (講師 4名、会員 11名、非会員 2名)

154回 定例研究会 2016年4月23日(土)
NTC コンサルタンツ (株) 大会議室
東京都中野区本町一丁目 32-5 ハーモニータワー 20階
テーマ; 「グローバルゼーションからローカリゼーションへ」
講演; 関廣野 氏 (思想史家 愛知県豊橋市在住)
参加者; 参加数 22名 (講師 1名、会員 13名、非会員 8名)

3)-3 図書販売

本年度は図書販売の実績は無である。

第3号議案

2016年度活動計画

(2016年7月1日～2017年6月30日)

1. 基本方針

2016年度は、「耕」、「電子耕」の発行、4回の研究会（現地研究会及び総会フォーラム含む）の活動をベースに、さらに以下の点に力を集中していく。

- ① 会員の拡大
- ② 会費納入率の向上
- ③ 機関誌「耕」の投稿促進；
- ④ 研究所ニュース（サブ機関誌）の発行（No.5～8）
- ⑤ 大山基金の有効運用

2. 研究所の運営体制

(1) 幹事会

幹事（所長）小泉浩郎

同（事務局長）渡邊博

同 山路永司、石川秀勇、塩谷哲夫、田口均、西山和宏、益永八尋

監事 松野肇

(2) 事務局

小泉浩郎（総括、表彰） 渡邊博（総務、事業） 田口均（機関誌、出版）

益永八尋（会計）

(3) 顧問

熊澤喜久雄、田淵俊雄、松坂正次郎、中川昭一郎、安富六郎

3. 機関紙「耕」の発行

(1) 発行計画

139号 2016年10月（特集；154回研究会）

140号 2016年12月（特集；第42期総会・155回研究会-現地）

141号 2017年3月（特集；156回研究会）

(2) 会員投稿の促進

昨年度は会員からの投稿の促進を目標に掲げたが、現状では会員からの自発的投稿はほとんどなかった。しかし、会員の開かれた交流の場として「耕」を位置づけるならば、会員投稿が活発であることが必要であり、引き続き会員投稿の促進を今後の重要な柱として位置付ける。とくに、若い世代からの投稿を促すために、研究成果の発表などの場として「耕」を開放していく。掲載の可否は編集会議で決定するが、「耕」に掲載できなかった場合でも、電子「耕」や「研究所ニュース」での発表も検討する。

4. 研究活動

(1) 定例研究会計画

定例研究会については、開催日、テーマについて可能な限り早めに決定し、準備する。
2016年度は以下の4回を計画する。

第42期総会	7月23日(土)
155回研究会(現地研究会)	10月22日(土) テーマ;未定
156回研究会(定例研究会)	12月10日(土) //
157回研究会(定例研究会)	4月22日(土) //

5. その他の重点事項

(1) 会員対策

ここ数年会員の長期減少傾向が続いているが、山崎先生が当研究所を直接主宰していた当時の会員数は120~130名であったことを考えると、まだ十分な会員数を抱えているといえる。しかし、会員の高齢化が年々進んでいるため、若い世代への訴えかけを重要な課題として位置付ける。

(2) 会費納入率の向上

事務局の積極的な働きかけが功を奏し、それまで低下傾向にあった回避納入率は、2015年度は3年ぶりに8.4ポイント向上した。しかし、それでも82%にとどまっているので、さらに納入率を上げるための働きかけを継続していく。

(3) 研究所ニュース(サブ機関誌)の発行

会員向けの「研究所ニュース」は研究所の活動近況をできるだけ早く届けるために有効な手段であり、今後も年4回程度の配信を行う(6/30日現在電子メール配信81名、封書配信131名)。

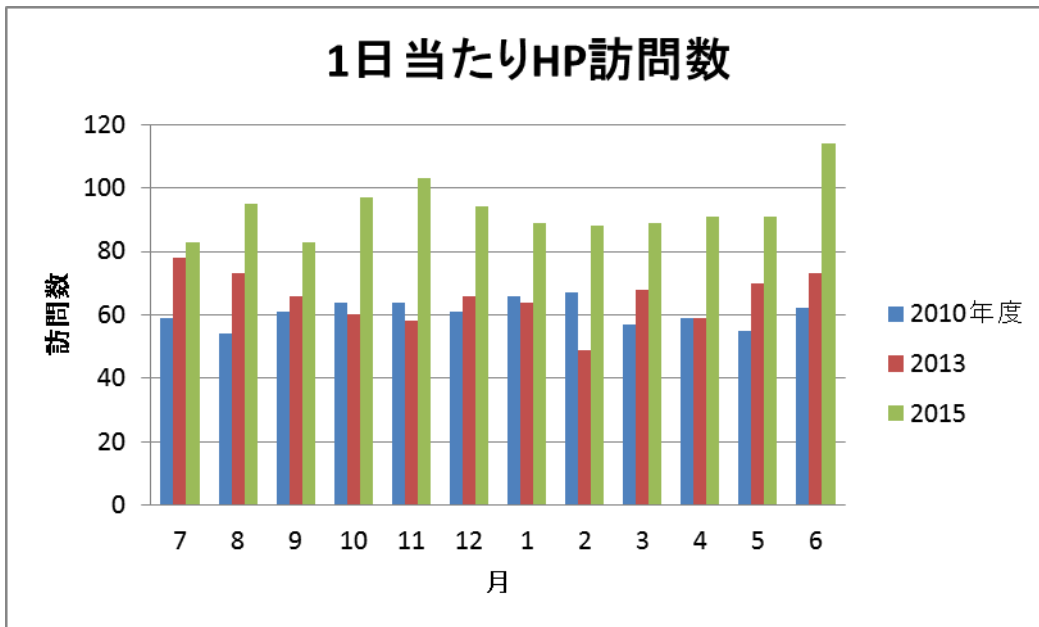
(4) ホームページの充実

2015年度は新しくHPビルダーソフト購入し、大幅にHPをリニューアルした。その結果、アクセス件数は2015年度1日平均93件/日で、2010年度の60件/日を大幅に上回り、1日当たりの検索ページ数でも2015年度99ページ/日から193ページ/日に大幅に増えた。

HPをみて研究所に連絡してくる人が出始めており、研究所の有力な広報ツールとしてHPをより一層活用することに力を入れる。

(5) 山崎記念農業賞の基金募集

山崎記念農業賞基金が少なくなっているため農業賞基金の募金をつのる。



※ホームページ（トップページ）を開いただけのヒット数は含まない。ヒット数だけなら2015年度は1日平均500件/日に達する。

